



福島県 小学校長会 会報

- 巻頭言…………… 1
- 教育ニュース
「福島県教育委員会教育長
メッセージ」…………… 2
- 特集「ふるさとを愛し とも
に未来を切り拓くたくましい
子どもの育成」…………… 3～6
- 支会だより…………… 7～10
- ふくしま人この道に生きる… 11
- 表彰・各部だより…………… 12



福島県小学校長会会長あいさつ

校長会の仲間として

コロナ禍での経験を生かして

福島県小学校長会会長 佐藤 浩 昭

令和 5 年 5 月 WHO は、新型コロナウイルス感染症を巡る緊急事態宣言を終了すると発表しました。また、国内においても、感染症法上の位置づけが 5 類へ移行されました。決して終息した訳ではありませんが、一つの節目となります。令和 2 年 3 月に、学校教育始まって以来の全国一斉の臨時休校となつてから、3 年以上に渡る感染症との戦いの日々でした。

長期の休校により、子どもたちは「学校へ来ることの楽しさ」「友達と一緒に生活・学習することの喜び」を再確認することができました。子どもも大人も、あたり前のことが、あたり前でなくなった時に、あたり前のことに感謝できるという体験をしました。

正に、先を見通すことのできない、何が正解か分からない中での対応を迫られ、校長としての判断、決断の連続、この対応でよいのか悩んだ日々もありました。また、教育委員会との連携もこれまで以上に求められました。

この間、校長会の会議も、紙面開催やオンラインなど、工夫をこらしながら行われてきました。開催する立場からは、紙面開催で、本当に内容が伝わっているのか、大切なところに目を通してもらえているだろうかと不安もあります。実際に、電話での質問は、直接説明すれば伝わっていたはずの内容が多くありました。オンラインでの会議では、直接説明ができるものの、どうしても一方的な説明になってしまいました。

今年度、第 1 回理事会、各部長会で支会長、支会部長の先生方と直接お目にかかることができ、協議の場がもてたことは、とても有意義であつたと感じています。共に校長会を推進していく仲間として、身近に感じることができました。

校長会の大きな事業である、第 52 回福島県小学校長会研究協議会会津大会において、県内すべての校長先生方と顔を合わせ、研修を深めることができることを楽しみにしています。これからも、校長会の仲間として、力を合わせていきましょう。

〈令和 5 年度 福島県小学校長会第 1 回理事会開催〉

福島県小学校長会の第 1 回理事会が 4 月 19 日（水）、パルセいいざかにおいて開催されました。会長として福島市立清明小学校長 佐藤浩昭氏が選出されました。また、新役員として次のとおり決定するとともに、本年度の活動方針などが承認されました。

- | | |
|-------|--------------|
| ● 会 長 | 佐藤 浩昭（清 明 小） |
| ● 副会長 | 逸見 健二（飯 坂 小） |
| | 近藤 静雄（金 透 小） |
| | 鈴木 基之（城 北 小） |
| | 高田 英世（中 村 二） |
| ● 監 事 | 松山 祐介（須賀川二） |
| | 杉原 智（喜多方一） |
| | 大内 克之（平 一） |



教育長メッセージ

「学びの変革推進プラン」について

福島県教育委員会教育長 大沼 博文

本日は、小学校長会、中学校長会の皆様を前にして、このような形でお話をさせていただく時間をいただきましたことに御礼申し上げます。

皆さんの学校は新年度がスタートして2週間が経過しました。学校内外で子どもたちの歓喜あふれる声が響いていることと思います。この3年間、コロナ禍の困難な中であっても、校長先生方には子どもたちの学びの充実とそれを支える環境づくりに取り組んでいただいていることに改めて感謝申し上げます。

新型コロナウイルス感染症は感染症法上の位置付けが5月8日から5類に引き下げられることになっております。学校現場においては、また、新たな対応が必要になってくると思われますが、子どもたち一人一人がその状況に応じて正しく判断して行動できる力を育んでいくことが非常に大切であると感じておりますので、校長先生方のご指導をお願いしたいと思います。

今日は、福島県の第7次総合教育計画の年次計画である「学びの変革推進プラン」について話をしていきたいと思います。

4月11日には市町村教育委員会教育長会議を実施しました。その時に、第7次総合教育計画は本県教育の共通の羅針盤であること、教育行政を市町村と県が一体的に推進することで、本県の子どもたちの成長を共に支えていきたいと呼びかけをしました。小・中学校の校長先生方におかれましては、そうした共通の思いで進めていきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

(※以下、資料により説明)

私が尊敬する教育哲学者の林竹二先生が残された言葉に「学ぶ教師だけが教えることができる」があります。

正に、これからの「学びの変革」を支える先生方においては、主体的に学び続ける姿勢が求められています。研修履歴に基づく受講奨励制度においても校長先生方との対話を通して先生方のモチベーションを高めていってほしいと思っております。

「学びの変革推進プラン」とは？

- ◇ 第7次福島県総合教育計画（令和3年12月策定、令和4年度から令和12年度までの9年間の教育計画）の年次計画として作成するもの

福島県が掲げる「学びの変革」とは？

- 全ての子どもに必要な資質・能力を育成するため、一方通行の画一的な授業から、個別最適化された学び、協働的な学び、探究的な学びへと変革すること
- このためには、「子どもたち一人一人に必要な力を確実に育成していく」という本来の学校の役割を果たすことができるよう、学校の在り方の変革も同時に進めることが必要

- 施策1 「学びの変革」によって資質・能力を確実に育成する
- 施策2 「学校の在り方の変革」によって教員の力、学校の力を最大化する
- 施策3 学びのセーフティーネットと個性を伸ばす教育によって多様性を力に変える土壌をつくる
- 施策4 福島で学び、福島に誇りをもつことができる「福島を生きる」教育を推進する
- 施策5 人生100年時代を見通した多様な学びの場をつくる
- 施策6 安心して学べる環境を整備する
- ◇ 「学びの変革」実現ビジョン
「学びの変革」を実現するための理念と重視する視点を記したもの
- ◇ 「学びの変革」実現のための戦略
「学びの変革」を実現していくための戦略的な政策パッケージとして令和5年度の主要施策をまとめたもの

小・中学校の校長先生におかれましては、校内の先生方、保護者の皆様に7次計画への理解を進めていただくと共に、市町村教育委員会、地域の方々とも理念やめざす方向性を共有していただくことで、子どもたちが安心して学ぶ教育環境にしていきたいと考えております。皆さんがリーダーシップを存分に発揮して「学びの変革」を確実に進めていただくことを期待しています。

両
沼ふるさとを愛し ともに未来を
切り拓くたくましい子どもの育成
～地域の財産としての位置づけを新たに～

会津坂下町立坂下東小学校 石見 勝則

1 はじめに

本町は、会津盆地の西部に位置し、基幹産業を農業とする地域である。町内には小学校が2校となり、昨年度創立10周年を迎えた。

本校では、基幹産業である農業について学ぶ機会を設けている。総合的な学習の時間を活用し、3年生では果樹、4年生では伝統野菜、5年生では米づくりと題材を絞って探究的な学習を積み重ねてきている。

それぞれの学習で体験活動を取り入れ、何度も観察、栽培、作業を行いながら五感を通した学習をしてきている。

6年生になると、町内という範囲を超えて「会津」全域に視野を広げた学習を行い、伝統的産業だけでなく、歴史、観光、文化なども取り入れて学習している。

2 新たな地域の財産の発掘へ



会津川口駅で

そんな6年生の学習に対して、昨年度大きな転換があった。それは、「只見線の全線復旧」である。2011

年以降川口ー只見間が福島新潟豪雨災害により橋梁が流されバスでの代行輸送となっていた。そしてついに昨年10月1日に全線復旧となった。只見線は、すでに観光路線の位置づけが強くなり、新たな地域資源となっている。沿線町村も地域活性化への期待が高い。しかし、現実的には児童が只見線を利用する場面は全くなかった。

6年生担任が児童と学習を進めていく中で、奥会津にも目を向ける必要があるのではないかと気付いた。そこで、全線復旧をきっかけとして、只見線を利用したの奥会津学習を展開した。

全線開通直後の見学のために、乗客が多く全く座れる状況ではなかった。児童は観光客に交じっ

て席を譲りながら車窓の風景に見入っていた。川面に映る集落や、すでに紅葉しきった険しい山々、そしてまだ豪雨災害からの復旧工事が続く状況を見ながら最終目的地の只見に到着した。只見では、「只見町ブナセンター」を見学し、森林環境の豊かさが動植物の多様な命を育んでいることを学んだ。また、田子倉ダムの見学をして、環境に配慮しながらの巨大な建築物に思いをはせた。この只見川流域は水力発電地帯となり、経済発展のエネルギー源であったことも学べた。そして、川口駅まで移動して東北電力奥会津水力館「みおり」の見学をした。ここでは水力発電の仕組みを学習したり、奥会津の生活について学んだりできた。



只見町ブナセンターで

様々な施設を見学する中で、自然と人間の共存について学習を深めた6年生であったが、その学習の成果をさらに広めようと、学習発表会でもその内容を組み込んでいた。視野を広げ、より広域を“自慢のふるさと”としてとらえられた。

3 むすびに

学校では、様々な教育活動が地域の財産としてすでに位置づけられていることが多く、毎年それをなぞるような学習が多く展開されている。しかし、それでは停滞でしかない。我々校長の役目は、常に新しいものに目を注ぎ、そこに価値を見いだしていくことにある。10年、20年後の社会を生きる子どもたちである。今、現在のことだけに目を向けるのではなく、その先に価値を見いだす先見性が必要だと考える。そしてそれこそが、学校ができる地域貢献だと思っている。地域の価値は、いまだに眠っているはずである。

ふるさとを愛し ともに未来を切り拓くたくましい子どもの育成 ～地域に根ざした特色ある教育活動～

只見町立朝日小学校 齋藤 勝芳

1 はじめに

本校は、南会津郡の西部、只見町に位置し全児童47名、今年で創立150周年を迎える歴史と伝統ある学校である。

また、南会津郡は、南会津町、下郷町、只見町、桧枝岐村の4町村で構成されており、豊かな自然に恵まれた地域であり、本支会では、その大自然を生かした「南会津ならではのふるさと愛」育成に向けた特色ある教育活動が行われている。その中で只見町内3小学校の取組の一端を紹介したい。

2 ふるさとを愛し ともに未来を切り拓くたくましい子どもの育成のために

只見町は、平成26年にユネスコエコパークとなり、町内3小学校は全てユネスコスクールに認定された。町教育委員会と連携したE S D教育は、まさに本町でしかできない自然体験にあふれている。その体験を土台として只見町が考えるふるさと愛が、「自然との共生」であり、以下の6観点について3小学校が取り組んでいる。

- (1) 伝統文化継承に関わる学習
- (2) 豊かな自然・文化の再発見に関わる学習
- (3) 防災と共生に関わる学習
- (4) 学んだことの発信に関わる学習
- (5) 「只見おもしろ学」の推進
- (6) 課題を見つめ、未来を切り拓く力へ

本校では、生活科や総合的な学習の時間において、田子倉湖散策、ブナセンター見学、癒やしの森、恵の森散策などの自然体験等の他、モノとくらしのミュージアム見学、昔語りの伝承やつる細工制作なども行っている。さらに、地球温暖化の問題と海洋学習をつなげた他地区のユネスコスクールとの交流を通して、只見町の自然を守るために自分たちにできることを考えた「ワンステップアクションDX」パンフレットを作成し、町民に伝える場を設けた。

＜ワンステップアクションDX＞の内容

- ・給食を残さず食べよう
- ・残してしまったものはダンポストに入れよう
- ・手を洗うときは水を止めよう

- ・歯みがきをするときはコップに水をくもう
- ・買い物をする時はレジ袋ではなくエコバッグを使おう
- ・部屋を出るときには電気を消そう
- ・只見の自然を守ろう

これらの活動を通して、自然体験や町の課題から

自分たちにできることを考え、全校生や協力企業、町民に呼びかけることができた。

他校の教育活動についてであるが、只見小学校では、八十里越え散策を実施し、只見川から日本海への水の循環について体感すると共に、ふるさとの歴史と新潟県が関連していることを学ぶことができた。

また、明和小学校では、地区に受け継がれている県重要無形文化財の「小林早乙女踊り」「梁取神楽」の継承のため、地域の方々の協力を得て指導を受けている。

その成果を「伝統芸能発表会」において披露することで伝統芸能を継承していく大切さを学ぶことができた。



只見町成果発表会



八十里を越えて日本海へ



奉納 早乙女おどり

3 むすびに

持続可能な社会を育成するためには、地域を担う人材の育成が欠かせない。行政と連携し、長中期ビジョンの共有と具現化計画を世の中の変化や児童の実態を踏まえつつ、地域の方々と共にやっていくことが大切である。

只見町で行っている小・中・高校と連携してのふるさとの未来を担う人材作りは他地区でも参考となる取組だと思われる。

今後も地域素材を生かした教育活動を行っていくことでふるさとを愛し、課題解決を模索して、ともに未来を切り拓く子どもを育てていきたい。

ふるさとに学び、自らの道を 切り拓く子どもの育成を目指して ～義務教育学校のメリットを生かして～

飯館村立いいたて希望の里学園 亀田 邦弘

1 はじめに

飯館村には、震災以前、中学校1校、小学校3校がありました。震災後は、原発事故の影響で全村避難を強いられ、他地区に仮設校舎を建て教育活動を実施しておりました。平成30年には帰村を果たし、4校で施設一体型の小中一貫教育を始めます。そして、令和2年度、統合し被災地初の義務教育学校として開校しました。教育目標「夢ふくらませ道を拓く」の具現を目指し、村教育委員会の指導のもと、豊かな教育環境と少人数教育のよさを生かしたきめ細かい教育活動の実践に取り組んでいます。

2 ふるさとを愛し ともに未来を切り拓く たくましい子どもの育成のために

(1) ふるさと学「いいたて学」の実践

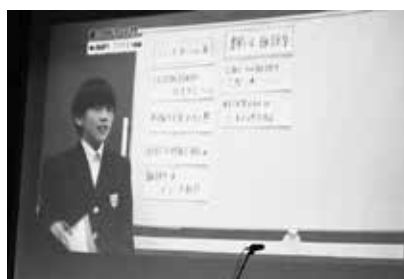
「いいたて学」は、義務教育学校ならではの独自の教科として創設され、全校生が「ふるさと飯館村」を体系的・探究的に学び、その成果を発信しています。また、カリキュラム・マネジメントにより、「いいたて学」と各教科等の関連を明確にし、探究的活動をより充実させ、学校教育全体を通して問題解決的な能力の育成に取り組んでいます。

① 前期課程の主な学び

- 低学年：体験を通した村民との交流等
- 中学年：郷土料理、地域産業等
- 高学年：農業、歴史、伝統文化等
- 前期全学年：いいたて元気太鼓の継承

② 後期課程の主な学び

- 7学年：過去（震災後の様子を含む）
- 8学年：現在（復興に関わる人々）
- 9学年：未来（未来の飯館村の創造）
- 後期全学年：田植え踊りの継承



「いいたて学」の発表（学習発表会）

(2) 9年間の系統性・連続性を活かした小中一貫教育の実践

本校では、義務教育学校のメリットを生かして、中1ギャップを解消し、前期課程と後期課程を円滑に接続できるような工夫に取り組んでいます。また、少人数教育のよさや強みを生かした教育活動を展開しています。

① 後期課程教員の専門性を生かした教科担任制・乗り入れ授業

- 音楽科：前期中高学年（教科担任）
- 外国語教育：前期中高学年（教科担任）
- 算数科：前期中高学年（乗り入れ）
- 体育科：前期中高学年（乗り入れ）
- 後期課程数学科における習熟度別学習

② 9年間を見通したキャリア教育

- キャリアパスポート「夢カード」：
夢や目標を記入し、9年間継続して活用

③ 多様な異学年交流

- 学校行事：入学式、卒業式、運動会、学習発表会等
- 児童生徒会活動：総会、役員選挙、中体連壮行会等
- 縦割り活動：縦割り班交流会等



外国語活動の乗り入れ授業（4年生）

3 むすびに

本校は、飯館村の豊かな自然や風土に恵まれ、子どもたちに寄り添ってくださる地域の方々に支えられ、教育活動を展開しております。私たち教職員も、地域の宝である子どもたちと一緒に、ふるさと飯館に学び、常に自身の資質向上に努め、地域とともにある学校づくりを進めていきます。

今後も飯館村唯一の学校として、豊かな教育環境と少人数教育のよさを生かしたきめ細かい教育活動を実践し、ふるさとを愛し、夢ふくらませ、自ら未来の道を拓くことができるような子どもの育成に取り組んでいきます。

双
葉

未来を創り、時代を生き抜く
子どもたちを育む新しい学校づくり
～川内村立義務教育学校の特色ある教育活動～

川内村立川内小中学園 吉田 頼信

1 はじめに

本校は雄大な阿武隈山地の山々が連なる自然豊かな環境のもと、東日本大震災と原子力災害の困難を乗り越え、令和3年度に開校した義務教育学校です。今年度は1学年から9学年までの児童生徒が64名在籍しており、1～4年生をホップ期、5～7年生をステップ期、8、9年生をジャンプ期とする指導体制とし、ホップ期から教科担任制を取り入れたり、様々な場面で1年生から9年生まで縦割り班で活動したりすることで、中1ギャップなどの解消を図っています。

校舎内に地域の方が集まる社会教育施設であるコミュニティハウス「にじいろ」が併設されており、子どもたちは日常的に地域の方と触れ合いながら生活しています。

2 ふるさとを愛し ともに未来を切り拓く
たくましい子どもの育成に向けて

本校では小学校にあたる前期課程の先生方と中学校にあたる後期課程の先生方が相互に授業に乗り入れたり、後期課程では教科教室制を取り入れ、少人数のよさを生かしたりしながら、学力向上に取り組んでいます。小規模の義務教育学校であるため、先生方の授業時数が抑えられるので、チームティーチングの授業を多く設定しながら個に応じた指導を推進しています。

全教室に電子黒板が設置されるなど、ICT環境も十分に整っており、タブレット端末を利用した学習については、常駐するICT支援員の協力のもと、指導の充実が図られています。

通常学級に在籍する特別な支援が必要な児童生徒への支援も手厚く、支援員やSC、SSWRと連携して丁寧な指導を行っています。また、県教育委員会より人権教育開発事業の委託を受け、自他を大切にし、互いに尊重し合うなど、多様性に寛容な児童生徒の育成に力を入れています。

生徒会活動は5年生から9年生で組織され、小中のそれぞれのよさを生かしながら毎年活動に工夫改善が図られています。1年生から9年生の合同で行われる遠足や運動会、文化祭は小中の行事

の融合が図られ、小規模ながらも賑やかに且つ盛大に実施されます。

震災を機に、北海道士別市や長崎県との交流事業が行われるようになり、特に6、7年生を対象とした長崎大学及び長崎大学附属小学校との連携による復興教育では、長崎大学の学生とともに本村の復興について学んだり、夏休みには長崎県を訪問して戦後の復興の歩みを学んだりするなどの体験の機会を得ています。また、校内の施設を活用して川内村教育委員会が主催する学習塾、放課後子ども教室など、外部人材の活用を図りながら子どもたちはのびのびと学んでいます。

「川内に生まれ、川内で育ってよかった」と、ふるさと川内に誇りがもてる教育の推進のため、コミュニティスクールを導入し、地域学校協働本部事業も軌道に乗ってきました。地域コーディネーターを中心に学校環境整備や学校行事への協力など、地域の方々の協力を得ながら教育活動の充実が図られています。

なお、幼保連携型認定こども園「かわうち保育園」も同一敷地内に設置され、日常の交流はもちろんのこと、合同運動会や合同避難訓練などを通して幼小のスムーズな接続を図り、0歳時からの連続した学びの実現を目指した取組も本校の特色の一つです。



春の遠足では、1年生から9年生が8つの班に別れ、助け合いながら徒歩で「いわなの郷」を目指しました。写真のように自分で釣ったいわなを塩焼きにして食べ、生徒会が考えたレクリエーションに全校生で取り組み交流しました。

3 むすびに

前期課程の先生方と後期課程の先生方が一つの職員室で仕事をしており、校種の枠を越えて連携・協働しながら9年間の義務教育期間の中で子どもたちを教え育むことができることも本校の強みです。これからの双葉郡、福島県をたくましく担う子どもたちの健やかな成長のため、保護者の方々や地域の方々との協力のもと、教育活動のさらなる充実を図ります。

福 今年度の活動に向けて

福島市立飯坂小学校 逸見 健二

1 はじめに

本支会は、福島市と川俣町の国公立45校（統合により2校減）の会員で組織されている。今年度は、新任2名を含む15名の新会員を迎え、新たなスタートを切った。定例会（全会員参加）及び方部ごとの研修会、各専門部会（行財政部、研究部、生徒指導部、広報部）などにおいて、会員の英知を結集して諸活動を推進していく。

2 本年度の取組**(1) 校長の資質向上（定例会及びニーズ研修等）**

定例会においては、学校経営上の諸問題について協議したり、情報交換・情報共有したりして、校長としての資質向上を図っていく。また、いじめ・不登校などの生徒指導上の課題への対応、教職員の資質・能力の総合的な向上、研修履歴を活用した対話に基づく受講奨励、学校における働き方改革の推進など緊急かつ重要な課題に対して、校長としてリーダーシップを発揮できるように、ニーズ研修会（各専門部会が運営）において協議を深めていく。

(2) 課題研究の推進（方部研修会等）

5方部ごとに県の研究課題に沿って、研究を推進していく。これまでの研究の成果と課題を踏まえ、今後の研究の方向性・重点等について十分に協議していく。特に、今年度の県研究協議会会津大会や次年度の東北連小青森大会の発表に向けては、実践内容・方法、検証の視点などを明確にして、研究を深化させていく。

(3) 人材の育成（「学校経営研修会」の開催）

地区中学校長会と連携し、新任校長・教頭を対象とした指導面・管理面、各種事務手続きに関する実務的な研修を行う。また、ミドルリーダーや管理職考査受考者を対象とした講義や模擬面接などの研修会を随時開催し、人材の育成を推進していく。

3 むすびに

今年度も、会員同士の連携・結束を強化し、時代に対応した教育、学校経営の在り方について常に情報共有しながら、様々な課題解決に向けて、福島地区の子どもたちと学校の未来を見据え、知恵を出し合いながら、会員一丸となって取組を推進していきたい。

伊 今年度の活動に向けて

伊達市立上保原小学校 伊藤 栄

1 はじめに

本支会は、1市2町（伊達市、桑折町、国見町）17名の会員で組織されている。昨年度末に伊達市立石田小学校が掛田小学校に統合され、会員が1名減少となったが、新任1名を含む3名の新会員を迎え、今年度の活動がスタートした。

2 本年度の取組**(1) 研究の推進**

学校数の減少により、昨年度から2班体制で研究を推進してきた。今年度行われる県研究協議会会津大会に向け「健やかな体」と「自立と社会性」の2分科会に分かれ、「研究課題」及び「研究の視点」に基づき研究を進め、第5分科会「健やかな体」では、発表支会を務める。県が示す「校長が行う具体的な『働きかけ』」と分科会の各視点で示している研究内容とをクロスさせながら、校長は「誰に対して」「どのような関わり」をすれば課題解決に結びつくかを検討し、協働的な実践研究に取り組んでいく。

(2) 各専門部会の取組

行財政部、研究部、生徒指導部、広報部の4部を設け、県の取組を踏まえて活動している。

諸調査の実施や集約を通して、支会の現状と課題をまとめたり、広報誌を通して、その結果や各校の教育活動を共有したりしながら、各学校の学校経営に生かされるようにしている。

(3) 校長としての資質向上

昨年度は、だて支援学校視察を行ったが、今年度は4月より伊達市に統合・開校した伊達高等学校の視察を8月に行う計画である。小・中・高の連携による「地域に愛着をもった生徒の育成」を目指す学校経営の在り方を考えたい。

(4) 人材の育成

教頭やミドルリーダーを対象とした教職員研修講座を開設し、学校経営等の研修会を実施し、次代を担う管理職の育成に取り組んでいく。

3 むすびに

今年度、学校数が減少したが、今後、更に統合等が進む見込みである。組織体制を見直し、「伊達はひとつ」の志を引き継ぎ、伊達地区の未来を担う子どもたちのため、教育活動の充実を目指して取り組んでいきたい。

安達 今年度の活動に向けて

二本松市立二本松北小学校 大内 雅之

1 はじめに

本支会は、二本松市、本宮市、大玉村の2市1村25名の会員で組織している。校長としての資質・能力、学校経営力の向上という本支会の目標に向け、会員が直面する課題の共有や協議の場・時間の確保を大事にしながら活動を進めている。

2 本年度の取組

(1) 研究の推進

本年度は、令和4・5年度2年間の研究のまとめの年となる。「校長の在り方」に視点を当て、各学校の課題解決の一助となるよう、組織的・継続的な研究を推進する。

- 二本松方部（旧二本松市）
第4分科会「豊かな人間性」
- 東達方部（旧安達町・旧岩代町・旧東和町）
第9分科会「自立と社会性」
- 南達方部（本宮市・大玉村）
第3分科会「知性・創造性」

また、本支会は二本松方部の研究を中心に、県小学校長会研究協議会会津大会での発表支会となっている。支会全体でバックアップしながら研究を推進する。

(2) 方部別研修

二本松・東達・南達の3方部別協議やさらに細分化した中学校区ごとの協議などを通して、地域ごとの課題や対応策、連携の在り方などについて共通理解の下、実践できるようにする。

(3) 各専門部会

行財政・研究・広報・生徒指導の4つの専門部会で活動を進める。県全体、支会内での調査結果を基にした話し合いを実施したり、年3回発行する広報「安達太良」へ全会員が寄稿したりすることを通して、会員の研鑽・交流を推進する。

(4) 人材育成

教育界を支える教員の人材育成は急務である。正式採用を目指す講師、管理職を目指す教員を対象とした研修会を中学校長会と連携し実施する。

3 むすびに

学校が直面する課題は多岐に及んでおり、さらに複雑化している。なかなか一筋縄ではいかない。会員同士の結びつきをさらに強め、英知を結集して諸課題の解決に向けて取り組んでいきたい。

「安達はひとつ」を合言葉にして。

郡山 「校長同士が学び合う校長会」～伝統と再構築～

郡山市立薫小学校 齋藤 和彦

1 はじめに

本支会は義務教育学校2校を含む全51校で組織され、市内5方部に分かれて実践を進めている。今年度は特に「校長同士が学び合う校長会」～伝統と再構築～を支会運営方針に掲げ、コロナ禍3年間の経験を逆手に、本当に大切なものは何か、私達校長会の真に必要なことは何かをあらためて見直し、新たな視点で運営推進を図っていくこととした。

2 本年度の取組

各校が抱える学校課題は多種多様であり、その対応に校長の校務、また、職員の負担感の大半を費やす現状もめずらしい話ではない。子ども、保護者の多様性の尊重と信頼関係構築、これに対応するチーム学校を担う教師個々の指導力向上、働き方改革と教育の質的向上、そして未曾有の感染症への対応も加わり、これらに適切に対処するに求められる校長像を維持、進化していくためには、校長自らの更なる資質力量の向上は欠かすことはできない時代となっている。そこで、これまでの諸先輩方が築いた伝統を継承しつつ、新たな視点で、「校長同士が学び合う校長会」の在り方を再構築していく。＜「校長同士の学び合い」を位置づける＞

- 第2回市小学校長会 [中央研修伝達講習]『タイム・マネジメント』～「働きやすさ」と「働きたい」を実践する校長のリーダーシップ～
- 第3回市小学校長会『子ども達の主体性を育むためのリーダーシップ教育（リーダー・イン・ミー）』
- 第4回市小学校長会『県立安積中高一貫教育について』
- ◎ ロイロノートの機能を活かし、各校の諸行事への対応方針や工夫点等を一覧できるようにして、同方部での対応のみならず、市内各校の取組を参考にできるようにしてきたことを今年度も継続する。

3 むすびに

各学校が抱える喫緊の課題、中・長期的に対応する課題に対して、また、理想とする学校経営の実現に向けて、本支会の存在が、各校の創意工夫と情熱を結び付ける役割を果たすものであってほしい。そして、支会の取組を通して校長同士が学び合い、自身の資質能力の向上を図っていくことで新たな教育活動の充実、創造につなげたい。

岩 今年度の活動に向けて

瀬 須賀川市立長沼東小学校 岩井 章

1 はじめに

岩瀬支会は、1市1町1村（須賀川市、鏡石町、天栄村）22名の会員で構成されている。今回の人事異動により、3分の1の会員が入れ替わったが、今年度も「岩瀬は一枚岩」を合言葉に、会員一丸となって取り組んでいる。また、一方通行の画一的な授業から、個別最適化された学び、協働的な学び、探究的な学びへの変革を目指し、今できる最良の教育を求め、学校経営に尽力していく。

2 本年度の取組**(1) 学校経営充実のための研修会**

4月の総会、4回の地区校長会、更に各校の学校経営・運営に役立てるために、2回の学校経営研究会を計画している。

① 先輩校長の体験発表

長年校長職を勤めている先輩校長の教員人生における成功談・失敗談、教育哲学等の体験発表の場を設け、よりよい学校経営に役立てていく。

② 教育講演会

今日的な学校課題解決の一助となる教育講演会を年2回実施する。教育関係者はもとより、教育関係以外の講師も招き、幅広い研修ができるようにする。

(2) 組織的対応による人材育成**① 新任校長研修会**

年3回、協議会会長・副会長による研修会を行う。校長としての心得や岩瀬地区の特質等、すぐに実践に生かせる内容である。

② 岩瀬地区教職教養講座

昇任考査を目指す教職員の人材育成と資質向上のために、中学校長会と連携し、8月に3日間予定している。

3 むすびに

5月初旬から、新型コロナウイルス感染症の分類が変更となり、インフルエンザと同様の対応となった。しかし、ウイルスの脅威が一気に無くなることはない。こうした現状を踏まえ、アフターコロナにおいて個々の校長がつながる校長会のネットワークは、大きな意味をもつものになると思われる。互いの状況を理解し、あらゆる情報を共有しながら、さらに校長同士の結びつきを強化していきたい。

石 今年度の活動に向けて

川 玉川村立玉川第一小学校 双里 義和

1 はじめに

昨年の石川町の小学校統合により石川支会の校長会は、8名という少ない会員数で組織されている。会員一人一人が複数の役職を兼務する厳しい状況ではあるが、会員相互の絆は強く、情報の共有や相互理解を図り、密接な連携を保ちながら活動している。小規模の強みを生かして、できうる範囲での運営を心がけたい。

2 本年度の取組**(1) 運営の基本方針**

学校管理運営上の今日的な課題とその取組について情報交換する事で共有化を図る。

(2) 地区研修会

今年度も「学校運営上の諸問題」について、各校の問題提起を受けた話合いの場を設けていく。特に教育界における今日的な課題である、「教職員の業務改善と働き方改革、多忙化解消に向けた各学校の取組」「学力向上に関する取組」や「ICT活用の推進とその課題」等に視点を当て、小グループに分かれての研究協議を進める予定である。

(3) 分科会研修

分科会研修を第3分科会（知性・創造性）に絞って取り組む。その中でも「視点2：知性・創造性を育む教育課程の編成・実施・評価の改善」に焦点を当て、各校の現状を会員全体で共有し、課題を明らかにすることで、より具体的な実践の在り方を模索したい。全会員が進めることで、内容の濃い充実した研修となることが期待できる。

(4) その他

第3回の研修会において、県中教育事務所から地区担当管理主事を講師として招き「学校経営上の諸問題」について講話をいただき、教育現場での対応に役立てていきたい。

3 むすびに

小規模の強みを生かした速やかな現状の把握や共通理解を通し、連携を密にした迅速な対応を今後も進めていきたい。

また、地区においての地元出身の教員の絶対的な数の不足や管理職希望者の減少などの現状を踏まえ、中学校長会と連携した組織的な人材の育成に力を入れていきたい。

田 今年度の活動に向けて

三春町立岩江小学校 羽染 聡

1 はじめに

本支会は、1市2町（田村市、三春町、小野町）14名の会員で構成されている。昨年度末に田村市で4校が閉校し会員減となったが、中学校からの異動1名と新任2名を迎え今年度をスタートした。

様々な役割を効果的に分担し、会員相互の連携と情報の共有を図りながら校長としての力量、そして、組織力の向上を目指して活動している。

2 本年度の取組**(1) 地区研修**

今年度、年3回の研修会を通して、支会の3つのブロックからそれぞれ小中一貫教育、キャリア教育、町の特色ある教育をテーマとし発表を行う。これらの情報を共有し、校長としての資質能力の向上に努めていく。

(2) 各専門部会

行財政部会及び生徒指導部では、県の諸調査の実施とともに調査結果をもとにした諸課題解決と連絡調整等を行う。

研究部では、各ブロックの主体性を生かしながら、1つの発表支会と2つの希望支会で実践研究を進める。特に、会津大会では視点2「評価・改善」について発表を行う。

広報部では、広報「田村」を年2回発行し、会員相互の情報の共有を図るとともに、教育長や退職校長からもご執筆をいただき、校長として考えるべき視点等について示唆をいただく。

(3) 人材育成

中学校長会と連携し、新任校長研修会を2回開催し、校長としての心得や日頃の悩み等に関する解決策を助言する。また、福島未来を担う人材の育成として講師等に対し、県の施策や日々の実践に生かせる内容についての研修会を開催する。

3 むすびに

新型コロナウイルス感染症の5類への移行に伴い、学校教育がより一層活発化し、コロナ以前に戻るだけでなく、新たな教育活動の展開が予想される。今後も、その時々状況や成果・課題等を支会全体で共有し、組織力を生かしながら校長が一丸となって子どもたちのために尽力していきたい。

北 今年度の活動に向けて

猪苗代町立千里小学校 土屋 裕史

1 はじめに

本支会は、1市2町（会津若松市、磐梯町、猪苗代町）の27校の会員で組織されている。新任2名を含む8名の新会員を迎え、新たなスタートを切った。今年度は、8月1日、2日に東山温泉を会場に行われる県研究協議会会津大会に向けて、これまで以上に会員相互の関係を密にし、大会成功に向けての準備に取り組んでいく。

2 本年度の取組**(1) 研究の推進**

研究部を中心に3班構成で推進しており、1班は「Ⅰ学校経営 1経営、組織・運営」、2班は「Ⅱ教育課程 3知性・創造性」、3班は「Ⅴ教育課題 10社会との連携・協働」を担当し、研究を推進することとした。特に、2班は発表支会となるため、6月の支会研修会では、班別研究を推進するとともに、よりよい発表につながるために本発表のリハーサル及び協議を行う。

(2) 各専門部の活動

行財政部、研究部、広報部、生徒指導部の4専門部を設けて活動する。行財政部は、諸調査の実施と集約、報告を行い、教育行政改善のための活動を推進する。研究部は、3班構成で推進していく。広報部は、データによる広報の発行を年3回行う。生徒指導部は、県生徒指導部の活動として諸調査の実施と集約を行い、本支会の現状と課題を「生徒指導部だより」としてまとめ報告する。

(3) 県研究協議会会津大会に向けて

本年度開催される県研究協議会会津大会に向けて、昨年度より準備を進めてきた。研究の推進を始め、実行委員会を中心としながら全会員で会津ならではのおもてなしができる大会となるよう進めていく。

3 むすびに

今年度は、新型コロナウイルス感染症の規制も緩和された状況で、新学期を迎えることができた。教育活動を戻しつつ、一つ一つが子どもたちの成長にどのような意味があるのかをしっかりと認識して運営に当たりたい。本支会では、各校の取組について情報共有し、子どもたちの学びについて意見交換をしている。今年度も様々な教育課題について、全会員が一丸となって取り組んでいきたい。

もったいないの心を育む

檜葉町 檜葉ほのぼの会主宰 高原力ネ子さん

檜葉町在住の高原力ネ子さん。現在、檜葉ほのぼの会を主宰しています。この会は、和服の端切れで吊るしびなや巾着づくりをしている地域住民のサークルです。現在では、檜葉町の小学校を定期的に訪れ、子どもたちにも布を使った飾りもののづくりの指導もされています。



○ほのぼの会の活動について教えてください。

活動の始まりは、2009年、和服の端切れを使って吊るしびなや巾着を作るところからでした。ひな人形は江戸時代、武士や裕福な家の飾りでしたが庶民は高価なため、飾ることができませんでした。そこで、和服の端切れを使って、ひな人形を作って吊るして飾ったのが最初と聞いています。そこには、「もったいない」の精神と無駄なく活用する知恵があったと思います。

○なぜ、ほのぼの会という名前にしたのですか。

会員それぞれの生きがいづくりのために発足しました。会員が会に参加すると、「ほのぼのとした気持ちになりたい」願いから命名しました。現在14年目ですが、本当に毎回ほのぼのとした気持ちになる時間となっています。

○東日本大震災以後は、地域のコミュニティとしての役割を果たされたと聞いています。

私は、檜葉町民としていわき市の仮設住宅に避難しました。いつ帰れるかもわからず、不安な日々を過ごしていましたが、ここでほのぼの会を再開しようと思い立ち、2012年に、仮設住宅の集会所でほのぼの会を立ち上げました。当時は十分な材料もなかったため、仮設住宅に避難している人たちに材料の提供を呼びかけたところ、布の切れ端やひもなどをたくさん持ち寄ってくれました。それだけでなく、自分も一緒に参加したいとの申し込みが相次ぎ、70名以上の方がほのぼの会に参加してくれました。

○昨年から檜葉町の小学校にも出向いて指導されているとお聞きしています。

檜葉町の地域学校協働センターから依頼がありました。子どもたちのお役に立つならばと、喜んで引き受けました。針を使うので、最初はなかなかうまくいかないようでした。でも、苦勞して作り上げた作品を見せに来る子どもの生き生きとした顔を見ると、来てよかったなあとつくづく思います。

○信条としていることは何ですか。

材料は、再利用の物を使うということです。子どもたちには、いらなくなったり、壊れたりするとすぐに捨ててしまうことの多い今だからこそ、「もったいないの心」をほのぼの会の活動を通して伝えたいと思っています。

プロフィール

- ・ 田村市都路生まれ 元檜葉町職員
- ・ S45年 結婚と同時に檜葉町へ定住

春の叙勲

～おめでとうございます～

令和 5 年の「春の叙勲」が発表され、本会元会員の叙勲者は次のとおりです。なお、規定により祝電をお送りいたしました。

☆瑞宝双光章（2 名）

藤田 充 様 元 白河市立白河第一小学校校長
二瓶 洋允 様 元 伊達市立保原小学校校長

令和 5 年度 小学校長会役員

◎支会長・常任理事 ○支会長

職 名	氏 名	勤務校
会 長	佐 藤 浩 昭	清 明 坂
副 会 長	逸 見 健 二	飯 透
	近 藤 静 雄	金 透
	鈴 木 基 之	城 北
監 事	高 田 英 世	中 村 二
	松 山 祐 介	須 賀 川 二
	杉 原 智 之	喜 多 方 一
支 会 長 ・ 理 事	大 内 克 之	平 一
	逸 見 健 二	飯 坂
	佐 藤 浩 昭	清 明
	○ 遠 藤 和 宏	醸 芳
	○ 佐 藤 政 俊	国 見
	◎ 安 齋 憲 治	二 本 松 南
	○ 鈴 木 規 男	本 宮 まゆみ
	○ 近 藤 静 雄	金 透
	○ 橋 本 一 弥	開 成
	○ 酒 井 健 一	橋
	○ 松 山 祐 介	須 賀 川 二
	○ 熊 田 順 一 郎	須 賀 川 三
	○ 酒 井 修 三	石 川
	○ 岡 部 史 則	古 殿
	◎ 小 荒 井 新 佐	小 野
	○ 佐 久 間 敏 晴	船 引
	○ 室 井 博 人	白 河 三
	○ 藤 田 篤 之	棚 倉
	○ 鈴 木 基 之	城 北
	○ 長 沼 敬 貴	謹 教
耶 麻	○ 杉 原 智 之	喜 多 方 一
	○ 樋 口 喜 敬	塩 川
	◎ 石 見 勝 則	坂 下 東
	○ 湯 田 眞 佐 利	坂 下 南
	○ 白 井 秀 行	桧 沢
	○ 栗 木 孝 直	田 島
	○ 高 田 英 世	中 村 二
	○ 鈴 木 和 一 郎	原 町 一
	◎ 井 戸 川 浩	双 葉 北
	○ 横 山 浩 志	な み え 創 成
い わ き	○ 大 内 克 之	平 一
	○ 大 石 正 文	平 五
	○ 菅 野 輝 義	平 三

(-財)福島県教育会館 事業ご案内

福島県教育会館の下記事業につきまして、
ご理解ご支援をよろしくお願い申し上げます。

- 夏休みの友 ●福島県立高校入試問題集 ◆貸し会議室
- 福島県書きぞめ展 ●教育関係者名簿 (教育関係者は半額)

福島市上浜町 10-38 office@kyouikukaikan.jp
TEL 024-523-0206 FAX 024-523-0208

令和 5 年度 小学校長会事務局員名簿

◎部長・常任幹事 ○副部長

役 職 名	氏 名	勤務校
事 務 局 長	石 幡 良 子	福 島 四
事 務 局 次 長	小 野 真 教	川 俣
総 務 部	◎ 菅 藤 文 彦	御 山
	◎ 阿 部 貴 史	渡 利
	○ 齋 藤 雅 敏	福 島 三
	高 橋 哲 也	瀬 上
	小 野 真 教	川 俣
経 理 部	◎ 松 田 倫 明	庭 塚
	○ 栗 城 敏 彦	南 向 台
行 財 政 部	◎ 古 田 幸 裕	岡 山
	○ 梶 山 俊 之	鳥 川
	熊 谷 賀 久	鎌 田
	佐々木 芳三郎	月 輪
	佐 藤 育 男	飯 野
	佐 藤 孝 宏	小 国
	車 田 敦 子	岳 下
	◎ 渡 邊 かほる	森 合
研 究 部	○ 小 松 浩 行	杉 妻
	服 部 英 昭	蓬 葉 東
	平久井 淳	清 水
	花 輪 忠 康	余 目
	渡 邊 裕 樹	平 野
	蓬 田 孝 夫	湯 野
	旗 野 礼 子	金 谷 川
	小 川 尚 子	野 田
	塩 田 俊 郎	附 属
	鈴 木 茂 茂	大 田
	児 山 秀 典	油 井
	◎ 大 内 剛	吉 井 田
生 徒 指 導 部	○ 大 内 伸 一	福 島 二
	八 巻 博 之	笹 谷
	荒 川 修	大 森
	伊 藤 比呂美	五 百 川
広 報 部	◎ 山 本 巖	三 河 台
	○ 長 澤 昭 仁	庭 坂
	鳥 田 祥 司	北 沢 又
	佐 藤 友 子	佐 倉
	小 野 忠 大	柱 沢
事 務 局	須 田 尊	事 務 長
	土 田 里 美	主 事

編集後記

新型コロナウイルス感染症の5類移行に伴い、各方面で様々な諸行事が以前の動きに戻りつつあります。しかし、コロナ禍とほぼ同時に行われたデジタル化の推進により、諸行事や会議等の在り方が大きく変化し、コロナ禍以前と全く同じようには進まないという問題点もみえてきました。このような中、本年度、第52回福島県小学校長会研究協議会会津大会が会津若松市で開催されます。コロナ禍後における各支会の運営面での工夫・改善の状況について一早くお伝えしたく、会報257号をお届けいたします。ご多忙の中、玉稿をお寄せいただきました関係各位の皆様方に心より感謝申し上げます。

- 発行 福島県小学校長会
〒960-8107 福島市浜田町 4 番16号 富士ビル 2 F
電話024(534)5411
会長 佐藤浩昭（福島市立清明小学校）
- 編集 山本 巖・長澤昭仁・島田祥司・佐藤友子・小野忠大
- 印刷 有限会社吾妻印刷